Ｎｏ．２５１【２０１７年３月２４日配信】
縄文時代の青函交流（担当：児玉）

皆さん、こんにちは。文化財課の児玉です。

あさって 3 月 26 日は北海道新幹線が開業して、ちょうど一年になります。

昭和 63 年 3 月 13 日、青函トンネルが開通して、本州と北海道が陸続きとなり、連絡船時代の青函圏を超えた新しい青函圏が現出しました。

かつて縄文時代には、津軽海峡の往来に伴い様々な交易が行われおり、北海道からは新潟県糸魚川市～富山県北部原産の「ヒスイ」、岩手県久慈原産の「コハク」が出土し、東北地方からは北海道白滝、十勝原産の「黒曜石」が出土しています。

縄文時代晩期後半、亀ヶ岡式土器の細別型式である大洞（おおほら）式土器の文化圏が東北地方全体に広がっていましたが、北海道南西部から津軽半島北部では聖山（せいざん）式土器と呼ばれる文化圏が存在していました。とてもローカルな地域です。

この聖山式土器の文化圏内にある遺跡から、直径 3 ミリメートル程度の複数のくぼみを作り、そこに白メノウや緑の石をはめ込んだ土製品が出土することがあります。このような特徴をもつものを「玉象嵌（ぎょくぞうがん）土製品」と呼んでいます。

私が、この「玉象嵌土製品」と出会ったのは、津軽半島北端の宇鉄遺跡（旧三厩村）の発掘調査現場でした。宇鉄遺跡からは 7 点出土し、そのうちのいくつかは自分で掘り当てたものもあります。約 20 年前のまだ大学生の頃です。それが、きっかけで玉象嵌土製品の分布を調べていくうちに、北海道からも出土していることを知りました。

そして、青森・北海道の両地域で出土した全ての玉象嵌土製品の観察や図化、計測といった調査を実施した結果、渡島半島日本海側沿岸で 1 遺跡（1 点）＝板状、渡島半島津軽海峡沿岸で 5 遺跡（20 点）＝すべて弓状、津軽半島北部で 1 遺跡（8 点）＝すべて棒状、であることがわかり、3 地域で土製品の形状に違いが見られるということを確認しました。

つまり、縄文時代晩期後半の北海道南西部と津軽半島北部は、聖山式土器が製作される一つの文化圏に、さらに細かい集団領域が形成され、津軽海峡を挟んだ各集団が相互に交流していたことを物語っています。

また、玉象嵌土製品の分布や形状の違いは、性格や用途、すなわち使用方法にも関係してきます。渡島半島津軽海峡沿岸の遺跡から出土する弓状の土製品は、ヒモを巻き付けることができる溝が彫られていることから、腕飾りとしての可能性が考えられます、その他の地域の遺跡で出土する板状や棒状の土製品は、地面等に置いた方が安定しており、象嵌している玉類の残存率が高いことや特異な出土状況をしていることから、装飾品ではなく祭祀的な道具として使用されたものと思います。

以上、玉象嵌土製品を通じて縄文時代の青函交流について考えてみました。